



大蔵流狂言「棒縛」(シテ:善竹徳一郎) 撮影:三田康史(フォトスタジオ・ミタ)
第7回「狂言を楽しむ徳讃会」(昨年11月16日 於:大阪府・善竹能舞台)

明るい笑いをもたらす演技と治療を求めて

善竹徳一郎氏は鍼灸師として病院に勤務しつつ、大蔵流狂言の狂言師(狂言師)は通称で、「能楽師大蔵流狂言方」が正式な呼称)として舞台上に立っている。

「大蔵流狂言は代々家業として受け継いでおり、私は4歳で初舞台を踏みました。稽古は、平日の病院勤務からの帰宅後に自分の稽古をし、週末に師匠である父に稽古をつけてもらいます」

師匠につけてもらう稽古は、独特の発声法に基づいた科白を覚えるところから始まり、科白をしっかり覚えたとところで型の伝授を受ける。師匠の声を聞き、その音を正確に反復できるようにすることが非常に大切なんだとか。

そんな善竹氏が鍼灸と初めて出会ったのは高校時代。クラブ活動で腰を痛め、治療を受けたときだった。

「高校卒業後、すぐ鍼灸学校には進学せず、大学で臨床心理学を学びました。心について学ぶうちに、東洋医学特有の心身一元論的な発想に深く興味を持ちました。また大学在籍中に心肺蘇生法の資格を取得したことで、自分の身体技能を使って他者の健康に貢献していくことに関心が向き始めました」

大学卒業後、明治東洋医学専門学校に

入学。免許を取得してから今年で、臨床歴は13年になる。この間、狂言の稽古も続けていたが、舞台上立つことも本腰に入れ始めたのは、5年前に長男が生まれてから。

今度は師匠として我が子にも稽古をつけつつ、今年10月には、大蔵流狂言でも特に重要な「秘曲」と位置づけられる「花子」という演目を披く(初演する)予定だという。

「最近によく、『いつ狂言方に専念するのかわ?』という声も聞くのですが、患者さんの健康の一助となることに生きがいを感じています。家業の狂言はライフワークとして継承しつつ、治療も続けていきたいと思っています」

狂言師としても、免許皆伝を目指している善竹氏が、治療家として最近注目しているのが、「笑い」の効用である。

「舞台では、家に帰ってからでも『ふふっ』と思いついて笑いができるような演技を目指していますが、患者さんには治療を終えて帰宅されてからも、思わず笑みがこぼれるような治療を行えるようにしていきたいと考えています」

大蔵流狂言や善竹徳一郎氏の情報は、一般社団法人高和会善竹能舞台公式ホームページ(<http://www.zenchiku.org>)に適宜掲載。

Portrait
ポートレート

善竹徳一郎氏